

随筆

ACTIVE研修体験（イギリス、スペイン）

大森 裕介

1. はじめに

2015年3月から2015年8月の半年間イギリスにて語学研修、2016年の1年間スペインにて現場研修を経験した。入社当初より海外で働くことに興味があり、ACTIVE (Ambitious & challenging Traineeship for Intercultural Value added Experience / 海外研修制度) にて機会を頂き、本研修を通じて貴重な経験をさせて頂いた。本研修は、語学研修であるため語学について経験したことを紹介する。

2. 語学学校

まず一般的な英語を学ぶため、ボーンマスに3ヶ月間滞在した。ボーンマスは、イングランドの南海岸近くに位置する町である。

ヒースロー空港に着き、イギリス人のタクシー運転手にピックアップされ、2時間程かけてボーンマスに移動した。車中は、いきなりイギリス人と二人きりとなり、何を言っているかわからず不安になったことを覚えている。

滞在予定のホームステイ先に到着し、ホストファミリーと会った。イギリス人夫婦の優しい方達だった(写真1)。



写真1 ホストファミリー

ご子息は、既に家を出ているため、その部屋を利用してホームステイの受け入れをしているとのことだった。

彼らは、熱狂的なラグビーファンであるため、試合がある時は、部屋から叫び声が聞こえてきて、慣れるまで度々驚かされた。また、ホームステイ先では、韓国人の学生も1名滞在していた。

到着直後から学校への行き方、バスの乗り方、ご飯の時間等説明して頂いた。理解できたのは少しだけだったが、それでも緊張からOK、OKと言って、その場をやり過ごしてしまった。

翌日から学校に通い始めたが、運良く、韓国人学生も同じ学校に通っており、学校に連れて行ってくれたため、なんとか難を逃れることができた。

最初にオリエンテーションとして学校の説明を聞き、クラス分けの実力テストを行った。休憩時間等の空き時間では隣の生徒と話してと言われて、振り向くと南米の方がいたので、知っている単語を並べてトライしたが、会話とは程遠かった。

日本人は、私一人しかおらず、拙い英語のみが頼りだった。

本校では、大学生や高校生が多く、連休中に英語を勉強したい、国から援助を受けての英語勉強、大学進学等、様々だった。中には軍人の方もいた。

私のクラスメイトの国籍は、韓国、メキシコ、オマーン、トルコ、クウェート、コートジボワール、コロンビア等だった(写真2)。

ペーパーテストでクラスが決められるため、Speakingは全くできないにも関わらず実力以上のクラスに入れられ非常に困惑した。授業はもちろん全て英語で行われ、質問も英語で行う必要があった。いきなり自己紹介してと言われて10人以上の前で自己紹介させられた時は、とても緊張した。

これまで英語教育を受けてきたが、その授業内容とは大きく異なり、Speaking中心の授業内容に、大変驚かされた。日本の学校では、英語を聞いて、読んでA、B、C、Dの内から答えを選ぶようなもの、穴埋め問題等だったが、聞いたこと、読んだことを



写真2 クラスメイト

要約して話す、それについてどう考えたかをクラスメイトと話す等、常にOUTPUTを求められる授業内容だった。

また、先生が質問する際も、日本では、指されてから答えることが一般的だと思うが、早押しクイズのように我先に全員が話し出す光景には、ただただ驚かされた。全員が上手、下手関係なしに自分が知る語録、文法を並べ、言いたいことを伝えきるという姿勢に非常に影響を受けた。

積極的に話す生徒は、成長が早く、この環境では、自発的に喋らない限り、自分が喋る機会はなかなか生れず、英語の上達が遅れてしまうため、他の生徒のように間違えること自体は気にしないように心がけて積極的に喋るようにした。

しかし、留学前は、外国人に囲まれ英語を話す環境を経験したことがなかったため、最初は、会話することが怖く、このように思えるようになるまでには、1.5ヶ月程度掛かった。だが、この頃から、ふと「なんとなく会話が続くようになった」と感じるようになり、少しずつ自信をつけ、英語での会話を楽しめるようになった。

今振り返ってみると、わからない単語が出てきた時に、異なる表現でなんとか伝えてその場を乗り切るというテクニックを覚えてから会話が続くようになったと思う。

授業中にそれぞれの国の文化の違いについて話すこともあり、中東の方達は、ラマダン（断食）は、貧しい人達の気持ちを分かることができるから好きだという方もいて、私にとって不思議な習慣に思えた。

週に一度、授業の後に、サッカーのアクティビティ

があり、趣味のサッカーを介してクラスメイト以外の友達を作ることができた。また、特に最初のうちは、英語ができないことによるストレスのせいか、サッカーが今まで以上に楽しく思えた。プレー中は、お願いをしようとしても伝え方がわからず、お願いされても理解できないことがあり、海外でプレーし、活躍するプロスポーツ選手達の努力を知った。同時にその堂々と話す姿を見て学習のモチベーションとなった（写真3）。



写真3 授業後のアクティビティ（サッカー）

少しずつではあるが、朝から晩まで英語に触れ続け、注文、買い物、予約、移動等少しずつ自分のできるようになり、イギリスでの生活に慣れてきたところでビジネス英語を学ぶために違う町へ移動した。チェルトナムと呼ばれるウェールズ国境近くに位置する田舎町である。

ホームステイ先も変更し、モロッコ出身のホストマザーとサウジアラビアの学生と生活することとなった。

その学校では、前の学校と異なり、社会人の方が英語力向上のために来ていた。フランス、ドイツ、チェコ、イタリア、スウェーデン等、ヨーロッパから来ている方達だった。

全員が口を揃えて言うのは、英語ができないと仕事にならないとのことだった。社内は、英語が共通言語だと言う方もいた。

ビジネス英語は、一般的な英語と異なり、見たことがない新しい単語を覚える必要があった。授業も、1クラス当り5人程度の少人数制となり、先生の説明スピードも速くなった。前の学校で3ヶ月掛けて手にした少しの自信は、すぐに消え去り、また一からのスタートとなった。思えば留学中、自信をつけては失っての連続だったと思う。

授業内容は、プレゼンテーション練習、グラフ説明練習、模擬ミーティング等を行い、その中でKYBという会社は何を扱っていて、それはどういった物なのか、何に使われているのか等の説明練習をした。

語学学校での学習を通して、外国語は、話すものだと考えるようになると、これまで勉強してきた文法、

構文等が、会話の中でどのようにして使われているか理解するようになった。ある程度会話できるようになるまで正直大変ではあるが、外国語に対しての意識が大きく変わり、楽しいものだと思えるようになった。

3. 語学学習

語学学習において発音というのは誰しもぶつかる壁なのではないかと思う。

日本人の苦手な音（R, TH, V等）があり、口の動きをしっかりと作り発音しないと、理解してもらえなかった。留学前は、正直そんなことは大した問題ではないと考えていたが、実際大きな問題だった。ホストファミリーに「DVDを貸して下さい」と言っても、全く理解されず、繰り返しても駄目だった。それからしばらく夕食中、DVDと何回も言われた。

英語を話す際は、口を大きく動かす必要があり、初めのうちは頬が筋肉痛になった。日本語はあまり口を開かなくても発音できる言語であるとのこと。通じるか通じないか分からないがとりあえず話してみても初めて自分の苦手な部分がわかってくるため、とにかく口に出して喋ることが大事だと思う。

動画サイトで日本人がぶつかる壁に対してのアプローチを紹介していて、非常に参考になった。例えばRの発音は、日本語でウーと言って形を作ってから発音すると音が出るのことで、従って実施してみると「何でそんなに急に上達したのか？」と驚かれた。話している本人としては、そんなに変わらないじゃないかと思ったが、ネイティブにとっては大きな違いであるらしい。また、最初のホストファミリーの孫の名前がリーガンといい、初めて会った時、リーガンと「らりるれる」の発音で呼ぶと「違う、ウーリーガンだよ」と教わり、一緒じゃないかと思ったこともあった。とにかくRの発音には苦しめられた。

インターネットでは、多様な英語の勉強方法が紹介されているが、結局自分が好きな物で覚えることが一番だと思う。映画での勉強のお勧めは、「アクションである」という意見や、「ドラマである」という意見等様々あるが、英語学習をしている本人が楽しいと思えることでないと続かないため、教材を探している方は、自分が観たいと思っている物を見ることが一番だと思う。慣れるという意味では、マンガだって何であれ良いと思う。参考書だけでなく、様々な物から吸収していくべきだと思う。語学は、筋トレのようなもので、話し続ければ話せるようになる、聞き続ければ聞けるようになる、書き続ければ書けるようになる、読み続ければ読めるようになると思う。

ホームステイ先が同じだった韓国人学生は、旅先でパスポート、財布を盗まれてしまい、イギリスにすぐに戻れなくなり、大使館、学校等で散々同じ説

明を英語でしたため、盗まれた時の状況説明が話す毎に上手くなっていったと語っていた。

語学は急に伸びるような物ではなく、少しずつ習得していく以外方法はないと思う。

4. KYB Steering Spain, S.A. (以下KSS)

半年間のイギリスでの語学研修の後、2016年1月よりKSS品質保証部で実務研修を行った。

KSSでは、お客様やサプライヤがイギリス、ドイツ、フランス、スペイン等多岐に渡り、それぞれお客様の言語に合わせて会話をする。最も驚いたのは、一つの打ち合わせで英語、スペイン語、フランス語とお客様が使う言語に合わせて使用言語が使い分けられたことである。過去の資料も英語、ドイツ語等で書かれており、現地スタッフは、2,3カ国語ないし、4カ国語を高いレベルで使いこなす方たちが働いていた。英語だけでも必死な私は叩きのめされたような気分になった。

実務での英語は、正確に何を考えているか伝える必要があり、できないとイメージした情報が出てこなかった。また、日本と現地の間に入る業務が多かったが、日本の意図するところを現地に展開、現地が意図することを日本に伝えることは、非常に難しかった。

現地では、全従業員が英語を話すわけではないので現地語で話すということが度々必要となった。アルファベットや数字の読み方すらわからない状態からのスタートだったが、英語を学んだ方法と同じように、とにかくすぐにスペイン語で話始め毎日少しずつ単語を覚え学習した。

日本人駐在員は、立場、駐在先にもよると思うが、英語か現地語の能力が必要となる。社内の打ち合わせでは現地語が用いられ、お客様が来たら英語で話す、また日本とやり取りする場合は、日本語で話し、必要に応じて通訳をする必要が出てくる。

5. カミノデサンティアゴ

スペイン駐在中では、週末や連休を使い、カミノデサンティアゴを歩いた。意味は、「サンティアゴへの道」である。この道は日本のお遍路のようなもので道自体が世界遺産に指定されており、キリスト教徒にとっての巡礼路である。フランス西部からスペイン西部に位置するサンティアゴ・デ・コンポステーラまで約800km続く道で、巡礼者は、コンポステーラにある大聖堂を目指す。道中は、常に矢印のマークがあり、それを辿っていけば自然と目的地に着くようになっているため、基本的には迷わない(写真4)。

きっかけは、KSSがあるパンプローナという町はその道の上に位置し、調べると、様々な国の方達と話すことができるということで挑戦することとした。

全部歩くことは不可能なので、時間が許す限り歩き、電車やバスも使い、目的地を目指した。

毎日朝6時半頃から歩き出し、一日25-35km歩く。バックパックに20kg程の荷物を詰め込み、道中、牛が放牧されているような場所や、ぶどう畑、麦畑を歩いたり、真っ暗な林の中ヘッドライトをつけて歩いたりもした。

長い距離を歩く上で重たい荷物は足枷となるため、不要な物は基本的に捨てていくことが常識になっていた。中には、小説やガイドブックの読み終えたページは、破り捨てるという方もいた。

普段歩き慣れていない巡礼者は、大量のまめを足に作りながら歩いていた。また、真夏に歩いたため、うだる様な暑さの中歩き、「何でこんなところ歩いているのだろうか?」と考えてしまうような時もあった。

夕方頃までにアルベルゲと呼ばれる巡礼者用のホテルに辿り着き、食事を取り、20時頃には疲れ果てて眠る。そしてまた歩くという毎日だった。

アルベルゲは、ボランティアで経営されている場所もあり、10€以下で泊まることができ、安価で旅ができるというのもこの道の人気の理由の一つである。ただ一人部屋ではないため、いびき対策の耳栓は、必須だった。多いときは、約100人一部屋のときもあった。

最終地点のコンポステーラでは、毎日ミサが行われており、旅を終えた巡礼者や観光客が参加する(写真5)。そこでは、ボタフメイロと呼ばれる、天井の滑車に吊るされた大香炉(重さ53kg、長さ1.5m)を大人8人でロープを引っ張りながら最高時速68kmで振り回すという儀式があり、圧巻だった。元々は、ペストや伝染病への予防として始まった儀式とのこと。

世界中からこの道に人が集まっており、朝食、道中、昼食、夕食時等、毎日知らない方達と出会い話すことができた。時には、アイルランド人グループに囲まれ会話したり、時にはスペイン人に囲まれ、スペイン語で会話したりと辞書を使う間もなく話した。実際ネイティブ同士の会話スピードは速すぎて理解は困難だったが、この旅で語学能力は鍛えられたのではないかと思う。言語に興味がある方に、ぜひ一度試して欲しい場所である。



写真4 カミノデサンティアゴ(矢印標識)



写真5 サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂

6. おわりに

今回、貴重な研修機会を与えて下さった皆様やKSSと一緒に仕事をしたローカルスタッフや駐在員の皆様にはいつも助けて頂き、非常に感謝しています。紙面を借りてお礼申し上げます。今後本研修で得た経験を業務に生かしていきたいと思っています。

著者



大森 裕介

2008年入社。オートモーティブコンポーネンツ事業本部ポンプ技術部。ベーンポンプの設計、開発に従事。